

山梨県中巨摩郡甲西町

中 川 田 遺 跡

—一般国道52号線（甲西バイパス）建設に伴う発掘調査—

1993. 3

山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所

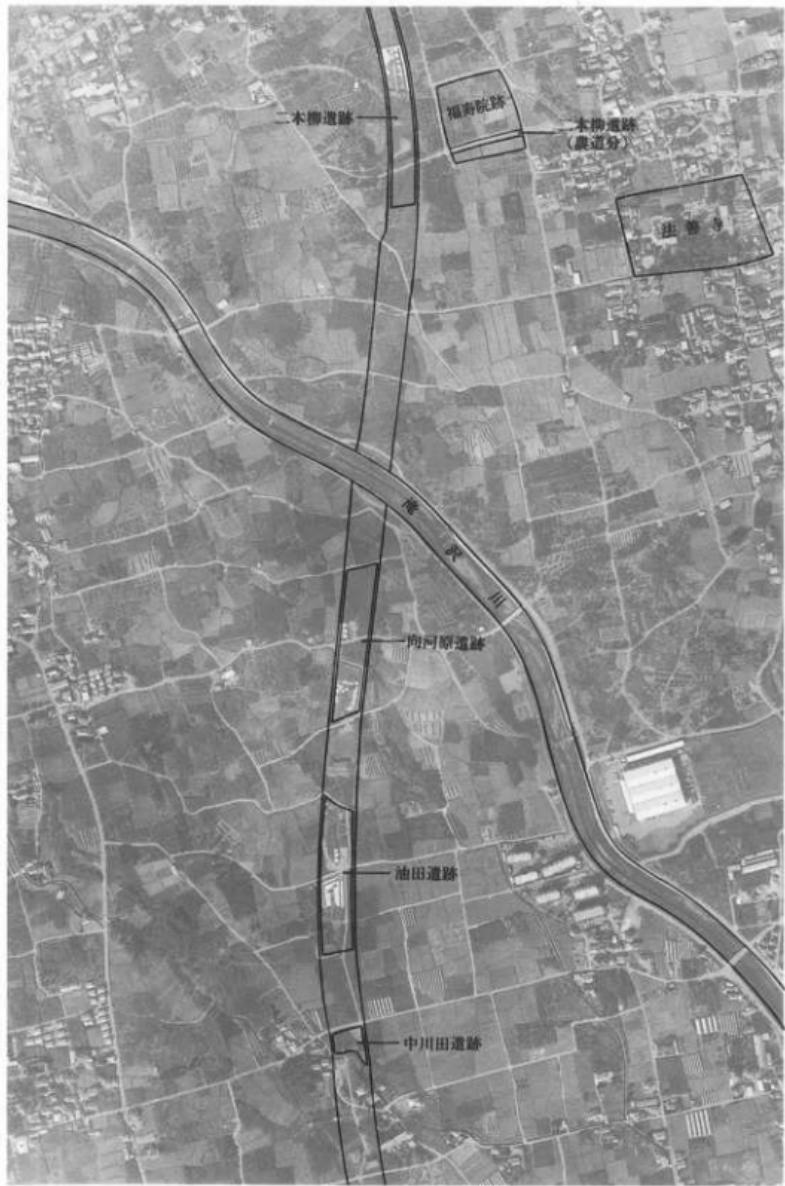
山梨県中巨摩郡甲西町

中川田遺跡

—一般国道52号線（甲西バイパス）建設に伴う発掘調査—

1993. 3

山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所



口絵 甲西バイパス予定路線と遺跡（高度525mより撮影）

序

本報告書は、一般国道52号線（甲西バイパス）建設に伴い山梨県中巨摩郡甲西町田島字中川田において調査された中川田遺跡の発掘調査報告書であります。

中川田遺跡のある甲西町は、峠西地域のほぼ中央に位置しており、御勅使川によって形成される大扇状地の扇端部にあたり、湧水量が非常に多く、県内でも有数の稻作地帯であります。

また、甲西町では、住吉遺跡、鈎沢遺跡などの弥生時代から平安時代の遺跡も数多く発見されており、この他にも、国指定史跡である安藤家住宅の保存にも力を入れ、町ぐるみで文化財を守ることに努力しております。

調査の結果、水田が三面、検出されました。特に、第一水田面からは鋤や鍬で耕して造営したと推測できる工具痕を顕著に残す土手状造構や畦畔が確認され、これらの造構が造られた直後に洪水によって埋没した様子が良く理解できるものであります。時期につきましては出土した陶磁器より江戸期末以降と考えられます。また、第二・第三水田面からも上層の水田面と同様に畦畔が検出されております。

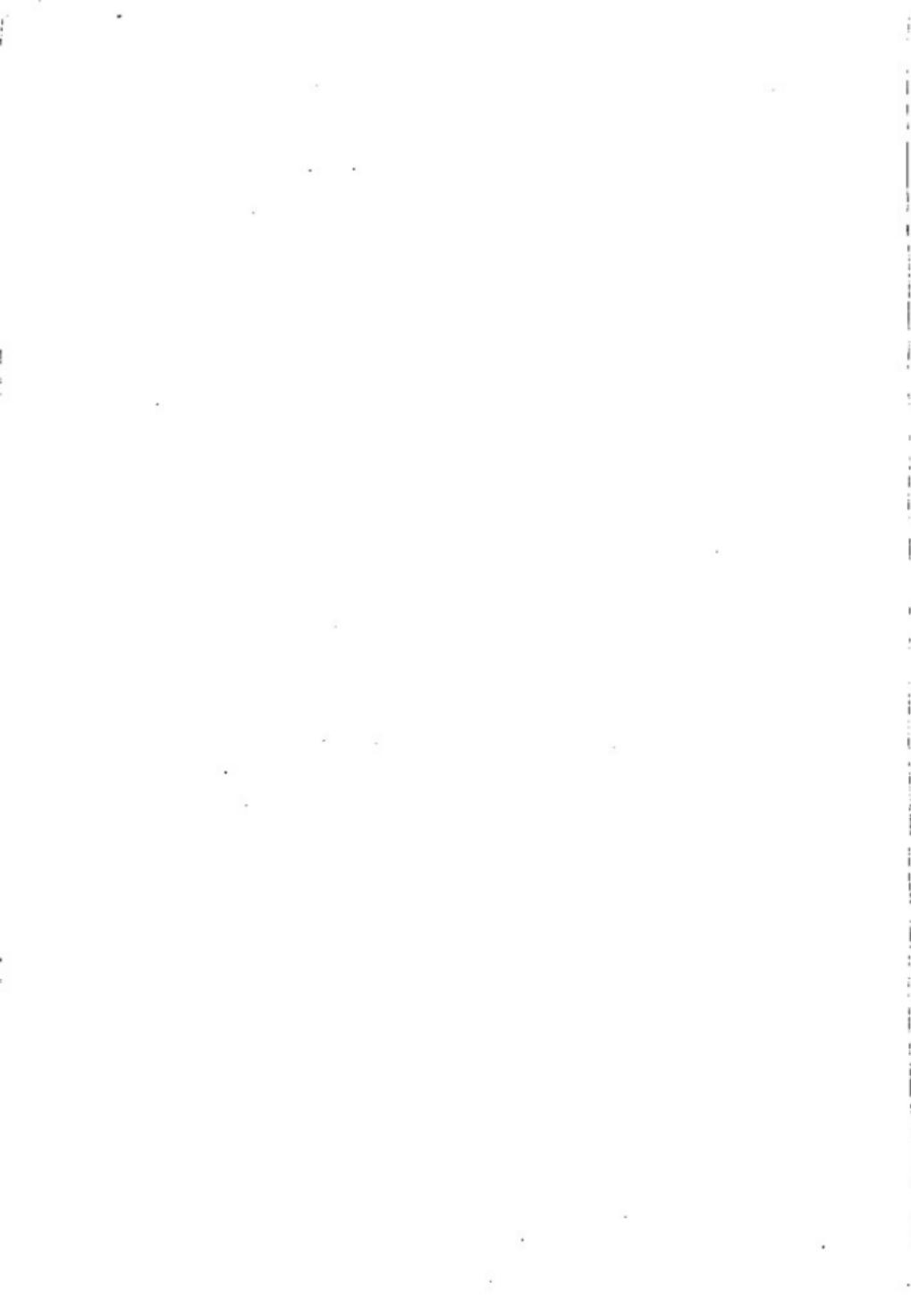
今回の調査では、降雨による湧水のため調査区域が水没し、調査の進行の妨げになることが度々ありましたが、これは今後、低湿地の調査を実施していく上で、有意義な経験であったと思われます。

末筆ではありますが、ご指導・ご協力を賜った関係機関各位、並びに直接調査に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

1993年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義



例　　言

1. 本報告書は、山梨県中巨摩郡甲西町田島字中川田527他にある中川田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、一般国道52号線（甲西バイパス）建設に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が建設省より委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが調査を実施したものである。
3. 本書の執筆は、第1章から第4章を吉岡弘樹が、第5章を平山優が行った。また、写真図版については、澤登正仁が作成した。
4. 遺物実測、トレース等の整理作業については、松野充延、松野なを美、渡辺洋子、望月厚子が行った。（敬称略）
5. 本報告書に係わる出土品および写真、記録図面等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
6. 獣骨については、国立歴史民族博物館西本豊弘氏に御教示いただいた。

凡　　例

1. 本報告書の、遺構・遺物の挿図の指示は次の通りである。
 - (1)挿図縮尺は原則として次の通りである。

全体図—1／200 畦畔・工具痕—1／40 溝状遺構—1／40
土器実測図—1／2 鉄鎌—1／2
 - (2)溝状遺構については、略号としてSDを用い、上層のものより番号を付した。
 - (3)遺構断面図の水糸レベルは標高を示す。
 - (4)土器実測図中のスクリーントーンは赤色塗彩部を示す。

目 次

口絵	3
序	5
例言・凡例	7
第1章 調査の経緯と概要	9
第1節 調査にいたる経緯	9
第2節 発掘調査の概要	9
第2章 地理的環境	11
第1節 遺跡の立地	11
第2節 周辺の遺跡	11
第3章 層位	14
第4章 発見された遺構と遺物	15
第1節 第1水田面	15
第2節 第2水田面	23
第3節 第3水田面	24
第4節 各水田面の造営時期	29
第5章 獣骨について	29

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図	12
第2図 発掘区域図	13
第3図 基本土層観察箇所配置図	14
第4図 基本土層概念図	15
第5図 第1水田面全体図	17
第6図 工具痕・足跡実測図	19
第7図 第1水田面出土土器・陶磁器	
実測図	20
第8図 SD-1平・断面図	21
第9図 SD-1出土磁器実測図	23
第10図 第1水田面出土土器実測図	24
第11図 第1水田面出土鐵縄実測図	24
第12図 第2・3水田面全体図	25
第13図 SD-2平・断面図	27
第14図 馬骨格図	31

図版 1 調査地近景・第1水田面完掘状況		図版 2 第1水田面完掘状況・4号畦畔と工具痕・SD-1完掘状況
図版 3 第2・3水田面完掘状況・第2水田面完掘状況		図版 4 SD-2完掘状況・第3水田面・SD-3・4・5完掘状況
図版 5 出土遺物		図版 6 出土自然遺物
図版 7 シートバイル工・調査風景		

表 目 次

第1表 獣骨観察表	34
-----------	-------	----

写 真 目 次

写真 1・2・3 獣骨	31
-------------	-------	----

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経緯

近年、全国的に交通網が大幅に変化し、特に、貨物・旅客輸送の大部分は自動車輸送に依存するところが大きく、その効率性向上が重要な課題となっている。山梨県の場合、自動車輸送として主となるものは、中央自動車道のみといっても過言ではなく、高規格幹線道路網計画の中では極めて、不充分であるといえる。このような現状の中で、一般国道52号線（甲西バイパス）建設計画が浮び上がってきたのである。

一般国道52号線は、静岡県清水市興津と山梨県韮崎市船山橋をつなぎ、新潟、長野、山梨、静岡の4県を縦に結ぶ重要な幹線道路の南側部分を司る1本である。しかし、甲府盆地内では西側縁辺部を、盆地より南下する方向では富士川に沿って進むため、カーブが非常に多く、勾配差も強い。更に、降雨量も多く通行止めや土砂崩れの危険も多大である。これらの危険回避などのため片側2車線の広い幅員を有するバイパス道路建設が計画化され、第一次工事区間として、中巨摩郡白根町在家塚～南巨摩郡増穂町大門間、全長約8kmが着工されることになった。これに基づいて平成元年度より断続的に試掘調査を南下しながら実施し、その結果、現段階で10箇所の遺跡を確認している。その結果によると、中川田遺跡では3面の文化層が確認され、第1面においては、畦畔が検出したことによって明らかに水田址であることが判明した。この結果に基づいて、学術文化課・埋蔵文化財センター・道路建設課・建設省の四者で協議を行い、1992年度に発掘調査を実施することを決定した。

『発掘調査に関わる書類等の手続き』

1991年（平成3年）12月17日～12月18日	甲西バイパス路線試掘調査
1992年（平成4年）5月12日	発掘通知を文化庁に提出
1992年（平成4年）6月1日～9月14日	発掘調査
1993年（平成5年）1月7日	埋蔵文化財発見届を小笠原警察署に提出
1993年（平成5年）1月11日～3月28日	埋蔵文化財センターにおいて整理作業

第2節 調査の概要

（1）発掘調査の経過

発掘調査は、試掘調査時の結果を重視し、アクセス道路取付け部分を除く道路幅50m分の面積約1,750m²を調査区として設定した（第2図）。

本遺跡は、調査前より異常な湧水が予想されていたため調査区の外郭に長さ7mのシートバイルを打ち込み（図版7）、内側に排水路を廻らし、更に釜場を2箇所に設け常に湧水をポンプアップする体制をとることとした。

表土の剥ぎ取りについては、第1水田面直上までバックホーで掘り下げ、堆土は埋め戻し作業を考慮し、南側約100mの甲西バイパス路線内に仮置きすることとした。また、第2・3水田面への掘り下げにおいても、同様の工法をとった。

グリッドは、5m×5mの正方形を南北方向にA～J、東西方向に1～10とし設定した。

（2）遺構・遺物の概要

検出された遺構は、次のとおりである。

水田址	3面
土手状遺構	1条
溝状遺構	5条

土手状遺構及び溝状遺構については、前者は第1水田面に、後者は第1・2・3水田面にそれぞれ伴うものである。

出土遺物は、非常に少なく、時期についてもさまざまなものがある。第1水田面の溝状遺構からは、18世紀代の染付などの陶磁器類が、第2水田面からは、鐵鎌の他、祭祀に使用されたとみられる獸骨（馬）、トチ・モモなどの種子類、桜皮などが出土した。

（3）調査機関・協力者

調査主体	山梨県教育委員会
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者	吉岡弘樹（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事） 平山優（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）

作業員・整理作業員

青木とよじ・秋山俊司・有泉登茂子・安藤静美・石川幸子・石川文治・
石川百枝・石倉光子・伊藤としの・井上ことじ・井上とめ子・井上巴江・
井上増美・入倉利重・大木つや子・大久保武夫・大森武雄・小田切ちよ
み・乙黒さつき・河西幸子・桜林文雄・清水つよむ・清水みつえ・田中
虎男・千野里美・千野良男・鶴田謙男・長沢久子・松野なを美・松野充
延・松本しま子・望月厚子・望月泰子・渡辺洋子（一般）・荻野由佳
(白根高校)・信田真由美(増穂商業高校)・堀内愛里(巨摩高校)
(敬称略)

協力者・機関

甲西町教育委員会・井上栄一・小川和茂（敬称略）

第2章 地理的環境

第1節 遺跡の立地

中川田遺跡は、山梨県中巨摩郡甲西町田島字中川田に位置する。本遺跡は、甲府盆地の西縁を南北に走る国道52号線の東側にあり、西方には、梯形山、北岳、鳳凰三山などの山塊を、仰ぎることができる。なお、標高は256mを測る。

南アルプスの唐松峠・ドノコヤ峠より流出する御動使川の扇状地は峠地区の北部を飲み込み、南は本遺跡のある甲西町田島にまで達しており、日本でも有数の巨大な姿を見せている。扇状地には小河川が数多く東南方向に扇状地堆積物を運んでおり、いわゆる複合扇状地を形成している。これらの小河川の中で甲西町地内を通過するものの代表として滝沢川があげられよう。滝沢川は、西山山地の市ノ瀬台地上部を源とし梯形町小笠原付近を扇頂とする小扇状地を形成し釜無川氾濫原に向けて平均20°の急勾配で高度を下げながら盆地床付近で典型的な天井川地形を造り出している。この地域に当たる若草・甲西地域では、比較的豊富な湧水帯が存在し水田經營に非常に適した一帯となっている。しかし、近年では水田から果樹栽培に転換がなされて、その面積も減少しつつある。

第2節 周辺の遺跡（第1図）

中川田遺跡①の周辺をみてみると、各時代の遺跡が点在していることがわかる。

旧石器時代の遺物は、市之瀬台地上に存在する長田口遺跡②・六科丘遺跡③からわずかに確認されているに過ぎない。

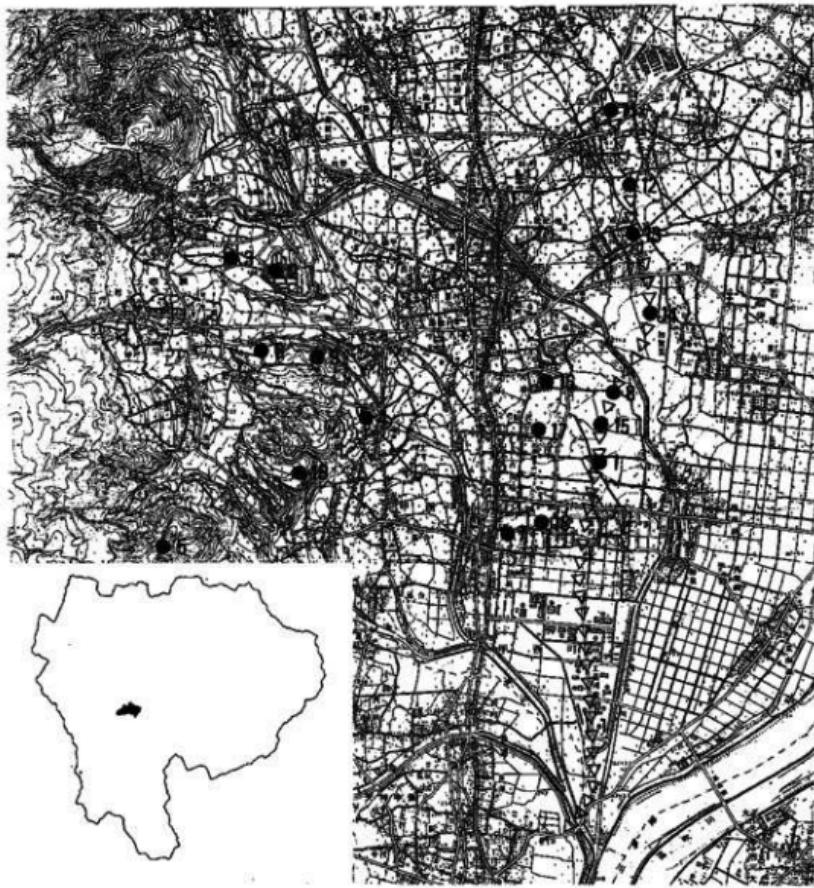
縄文時代の遺跡は梯形山山麓から市之瀬台地に多く分布しており、代表的なものとして、早期後半の土器が採集された星喰場遺跡④・土居平遺跡⑤（前期～中期）・上の山遺跡⑥（早期～晩期）などがあげられよう。

弥生時代の遺跡としては、扇端部の湧水帯付近に位置する住吉遺跡⑦・向河原遺跡⑧、先述した市之瀬台地縁辺部には、上ノ東遺跡⑨・御前山遺跡⑩などが存在する。

古墳時代以降になると、扇端部の湧水帯上に占地する遺跡が非常に多くなる傾向をみせる。甲西バイパス計画路線上の遺跡としては、十五所遺跡⑪・村前東遺跡⑫・新居道下遺跡⑬・二本柳遺跡⑭・油田遺跡⑮の存在が明らかとなっている。この他に、久保沢遺跡⑯・鮎沢遺跡⑰・清水遺跡⑲等、主要な遺跡があげられる。

参考文献

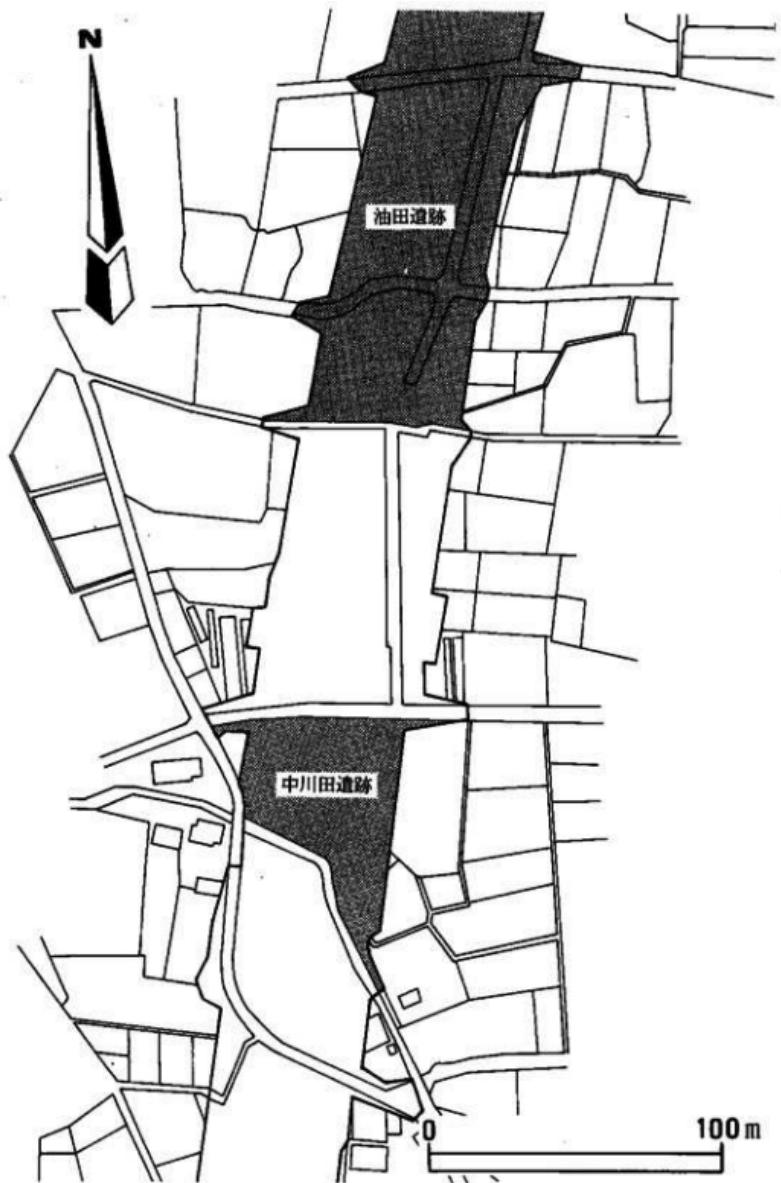
- 梯形町誌 梶形町誌編纂委員会 1966
若草町誌 若草町誌編纂委員会 1990
六科丘遺跡 梶形町教育委員会・六科山遺跡調査会 1985
二本柳遺跡 山梨県教育委員会 1992



- | | | |
|----------|----------------------|---------|
| ① 中川田遺跡 | ② 長田口遺跡 | ③ 六科丘遺跡 |
| ④ 星喰場遺跡 | ⑤ 土居平遺跡 | ⑥ 上の山遺跡 |
| ⑦ 住吉遺跡 | ⑧ 向河原遺跡 | ⑨ 上ノ東遺跡 |
| ⑩ 御前山遺跡 | ⑪ 十五所遺跡 | ⑫ 村前東遺跡 |
| ⑬ 新居道下遺跡 | ⑭ 二本柳遺跡（甲西バイパス分+農道分） | |
| ⑮ 油田遺跡 | ⑯ 久保沢遺跡 | ⑰ 鮎沢遺跡 |
| ⑯ 清水遺跡 | | |

△△△ 甲西バイパス建設予定路線

第1図 周辺遺跡分布図 ($S = 1/50,000$)



第2図 発掘区域図 ($S = 1/2000$)

第3章 層位



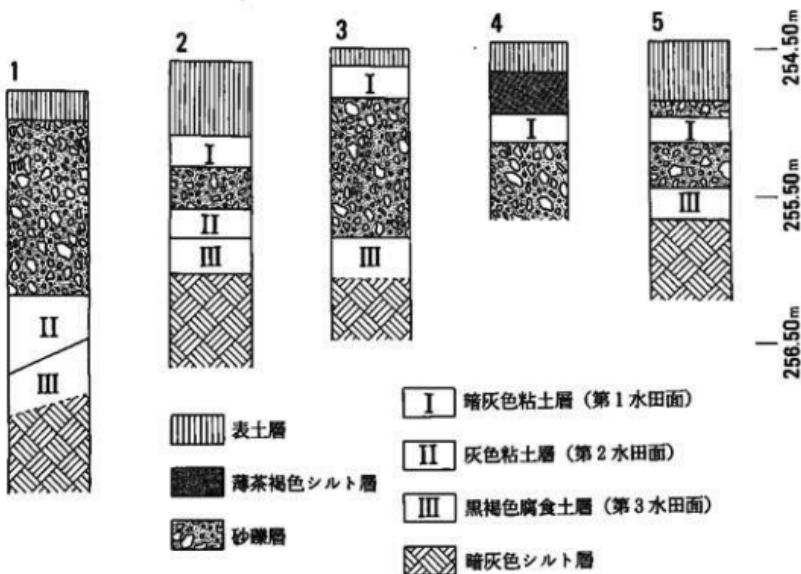
第3図 基本土層観察箇所配置図 ($S = 1/1,000$)

田を造営させる。しかし、第2・4地点では、上層との一体化が著しく、畦畔の検出は不可能であった。砂礫層は、調査区の全域より確認されているが、特に第1・3地点に非常に厚い堆積をみせる。第1地点については、現在でも遺跡地の南側をかすめ、西より南東方向に流れる滝沢川支流にあたる小河川の旧河道と推測できる。第3地点のものについては、暗灰色粘土層（第Ⅰ層）から黒褐色腐食土層（第Ⅲ層）の一部まで深く削平している状況から前者より古い時期の旧河道と想定できる。灰色粘土層（第Ⅱ層）は、第1・2地点から南側にかけて存在を確認した。第1地点では、その直上まで砂礫層の堆積時に荒らされているが水田耕作の痕跡が確認され、第2地点からの段構造を呈している。黒褐色腐食土層（第Ⅲ層）は、植物遺体を主体とした層で調査区の前面より検出される。旧地形を簡単に復元してみると、調査区の北側半分にフラット面が存在し、この部分でのみ水田經營が行われている。また、第2地点より南側では急激に落ち込む谷状地形を形成する様子が伺える。暗灰色シルト層については、調査

不定形を呈する調査区のため、長軸にあたる東西・南北の2方向について、遺跡範囲の内側に掘られた排水路の断面の5箇所から基本土層を観察した（第3・4図）。

遺物は、主として灰色粘土層（第Ⅱ層）中及びその上面より、遺構は、暗灰色粘土層（第Ⅰ層）・灰色粘土層（第Ⅱ層）・黒褐色腐食土層（第Ⅲ層）の三層より検出された。

暗灰色粘土層（第Ⅰ層）においては、第3地点を中心に第2地点、第4・5地点方向に、なだらかな傾斜を持つて下る傾向をみせ、水



第4図 基本土層概念図

終了時の深掘りで確認されたもので調査区の、ほぼ全域に広がりをみせる。

以上の様に、御動使川・滝沢川によって形成された複合扇状地の扇端部付近の微高地南斜面を利用した水田耕作等の状況を把握しようとするには、河川氾濫の影響が大きく非常に難しいものであった。

第4章 発見された遺構と遺物

第1節 第1水田面

第1水田面は、畦畔と土手状造構で区画された水田によって構成されており、その範囲は、調査区の中央部から西側の東西約35m、南北約16mと南東部隅の東西約6m、南北約6mの2箇所より確認され、総面積は570m²を測る。遺存状況は、悪く中央部より北東部にかけては上層との土壤一体化がみられ畦畔等の検出は極めて困難で、痕跡のみが確認されたものもあった。

(1) 畦畔 (第5図)

畦畔は、便宜上西側よりNo.1～8とした。No.1は、検出長10.0m、上端幅75～140cm、下端幅120cm、水田面との比高差は、平均15cmを測り、N-82°-Wの方向に伸びる。No.2は、検出長5.6m、上端幅85～135cm、下端幅120～170cm、水田面との比高差は、平均18cmを測り、N-13°-Eの方向に伸びるが、溝状造構(SD-1)に南側部分を切られている。No.3は、わずかにNo.1との接続部しか検出されずNo.2の延長とも理解できる。No.4は、全長10.5m、上端幅

100～135cm、下端幅130～170cm、水田面との比高差は、平均9cmを測り、N-70°-Wの方向性を持つ。No.5・6については、前者が検出長約10m、幅95cm、方位N-5°-E、後者が検出長約3m、幅65cm、N-85°-Eの方位で痕跡がつかめたのみである。No.7・8は、調査区の南東部より検出されたものである。No.7は、検出長3.1m、上端幅38cm、下端幅70cm、水田面との比高差は、平均5cmを測る。なお、方位は、N-76°-Wである。No.8は、No.7と接続するものであり、検出長4.2m、上端幅40cm、下端幅76cm、水田面との比高差は、平均10cmを測り、N-6°-Eの方位を持つ。

これらの畦畔は、規模などから大畦畔（No.1～6）と小畦畔（No.7・8）に分けることができる。

大畦畔は、台形状の断面形を呈し造営に際しては、鍛あるいは鋸状工具の利用がなされている。また、その走行は真北を意識しているようではあるが東方に主軸をずらしていく傾向がみられる。これは旧河川の蛇行と土手状造構に制約を受けているためであろう。

小畦畔は、半円形の断面形を有しており、大畦畔にみられるような工具痕はみられない。検出範囲が極めて狭い部分に限られているため詳細はつかめない。なお、水口については、認められなかった。

（2）水田区画と傾斜（第5図）

水田区画として明確に数えることができるは9区画である。しかし、形状が把握できるものは、No.4・5の2区画のみである。

No.4は、長軸10.5m、短軸2.8m、面積約30.0m²の長方形を呈し、平均標高は255.8mを測る。No.5は、長軸約11.5m、短軸4.0m、面積約42.0m²の台形を想定でき、土手状造構に接続し、平均標高は255.7mを測る。

また、水田区画の中で標高の高いものは、No.1（最高値256.0m、平均値255.9m）で緩やかに東南東に下る傾斜をみせる。

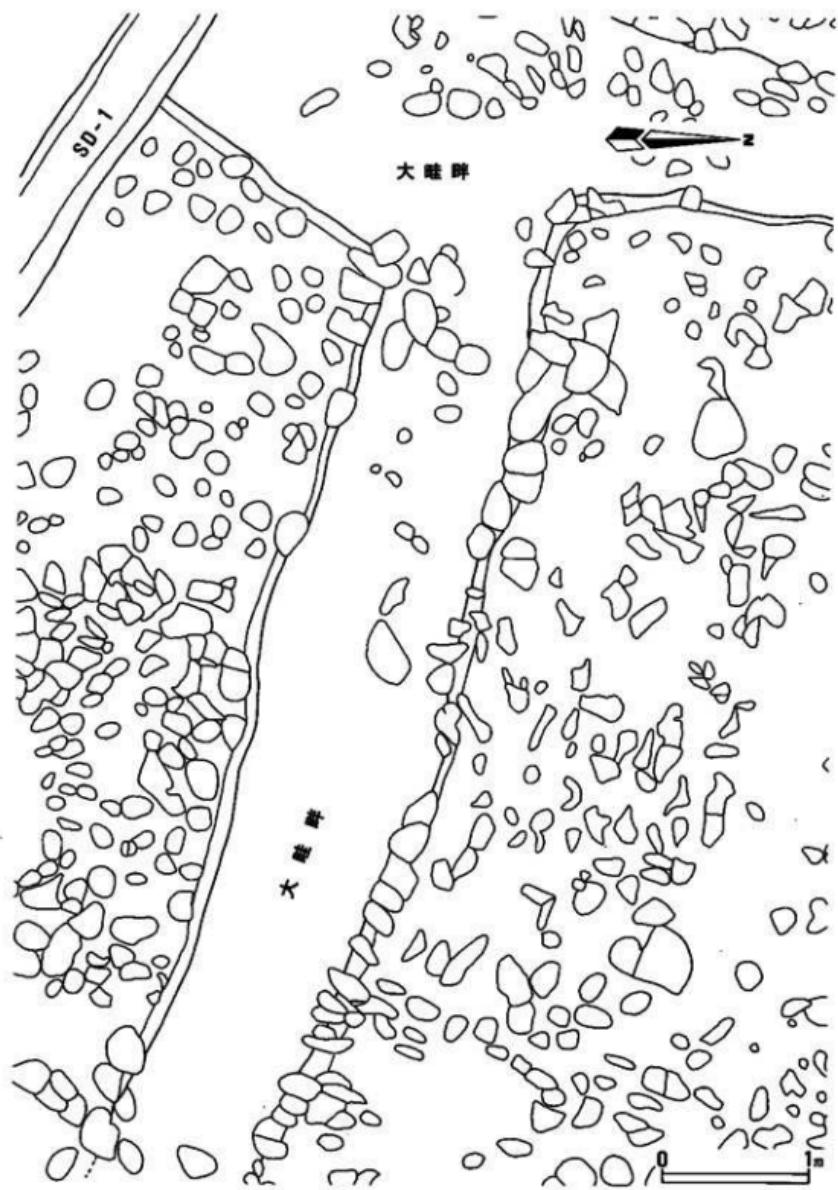
（3）土手状造構（第5図）

調査区をかすめるように、西より南東に流れる旧河川と後述する溝に挟まれるように検出されたもので、検出長約12.0m・上端幅平均260cm・下端幅平均485cm・水田面との比高差平均20cm・平均標高255.8mを測り、形状は偏平な痛鉢状を呈する。整形方法は主として、当面を構成している暗灰色粘土層を大畦畔形成時にみられたものと同様に、鍛あるいは鋸状工具を用い造り出しており人間のものと考えられる足跡も加え痕跡が顕著に検出されている。しかし、大畦畔との接続部分については確認できなかった。

（4）溝状造構（SD-1）（第5・8図）

A-2区からI-8区にはほぼ一直線に検出された。確認された長さは約44cmで幅は最大51cm、最小28cm、深さは平均39cmである。底面形は西方では半円形を呈し、東に向かうにつれ平坦化





第6図 工具痕・足跡実測図 ($S = 1/40$)

して、側面に平板を杭によって貼り込んで行く形態をとる。溝内の堆積土は、C-D地点で2層、E-F・G-Hで3層が認められ、他の地点においては全て単層で、暗灰色粘土と砂疊層がその主体を占める。

造構の性格については、土手状造構にはほぼ並行して存在しているものの、No.2畦畔との切り合いなどから、第1水田面經營時に機能していたとは考えにくく、上層より掘り込まれていたものと推測しておきたい。

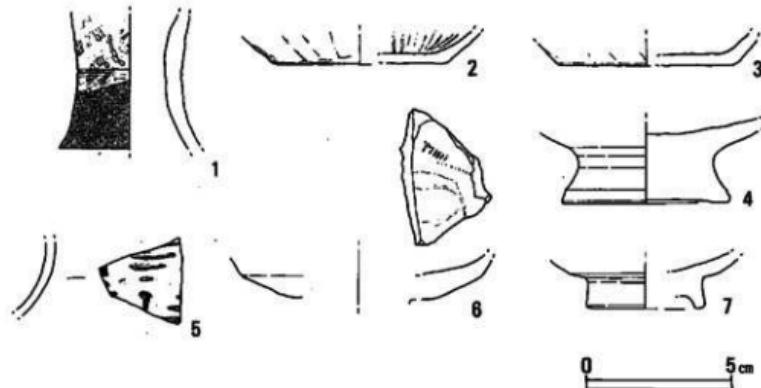
(5) 出土遺物 (第7・9図)

出土遺物には、弥生土器・土師器・陶磁器がある。溝より出土した2点を除き、水田面を覆う砂疊層より検出され、水田經營時のものではなく他所より流出したものであり、水田の時代決定ができる資料ではない。溝より出土したものを除くと以下のものがあげられる。

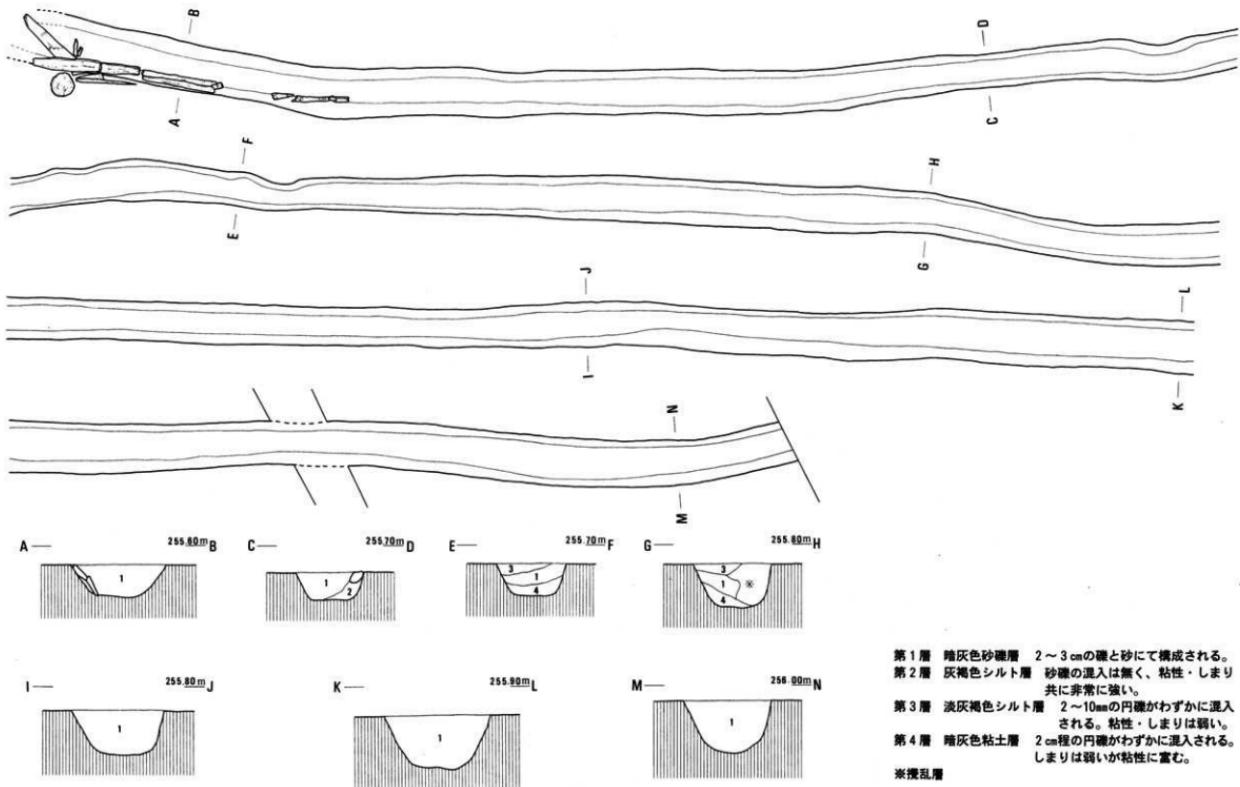
弥生土器 (第7図1) 中期壺型土器の特徴を持つ頸部があり、頸部径は3.6cmを測る。外面は、細い沈線が一周し、その上部には細かなLR繩文が施され、下部には赤彩がなされている。また、内側には横位のヘラミガキがわずかに確認できる。

土師器 (第7図2・3・4) 2及び3は、甲斐型杯であるが、残存状況は悪く底部周辺をわずかに残すのみである。2は底部径約5.8cmを測り、外面には斜位のヘラミガキがみられ、内面には暗紋が施され、時期はⅦ～IX期の範疇に入るものであろう。3は、底部径5.9cmと推測され、外面には斜位のヘラミガキがされる。内側の調整については磨滅がひどく判断できない。4は、柱状脚付皿であり、皿部分のみ欠損する。底部には、右手固定の回転糸切痕が残る。底部径は、5.95cmを測る。また、胎土には金雲母の混入がみられる。時期は平安時代末を比定できよう。

陶磁器 (第9図5・6・7) 5は18世紀の瀬戸美濃系と推測できる染付の碗である。6は青磁の皿で体部やや上部に縫を持ち口縁に向けて立ち上がる。軸は高台付近を残し、前面に施さ



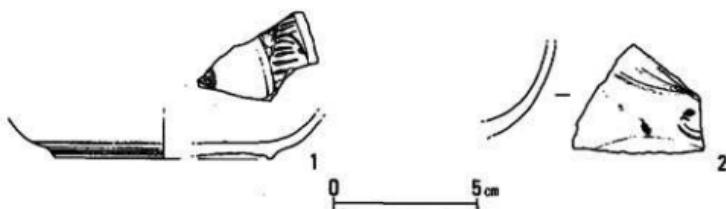
第7図 第1水田面出土土器・陶磁器実測図 (S = 1/2)



第1層 緙灰色砂礫層 2～3cmの礫と砂にて構成される。
 第2層 灰褐色シルト層 砂礫の混入は無く、粘性・しまり共に非常に強い。
 第3層 淡灰褐色シルト層 2～10mmの円礫がわずかに混入される。粘性・しまりは弱い。
 第4層 緙灰色粘土層 2cm程の円礫がわずかに混入される。しまりは弱いが粘性に富む。

*擾乱層

第8図 第1水田面 SD-1 平・断面図 (S=1/40)



第9図 第1水田面 SD-1 出土磁器実測図($S = 1/2$)

れる。また、買入がやや多く入る。7は瀬戸美濃系の天目茶碗である。底部径は4.1cmを測る。鉄軸は削り出し高台近くにまで施される。

この他、磁器が2点、溝状遺構(SD-1)より出土している(第9図1・2)。いずれも底部近くの覆土中より検出したものである。1は肥前産の染付皿である。内面見込み部に施文・界線、外面についても界線が描かれる。2は產地不明の染付碗である。外面は長石釉が厚く施されているため須のじみが激しい。製作年代は1・2共に18世紀代が充てられる。

第2節 第2水田面

第2水田面は、畦畔と溝で構成されている。その広がりは東西30m×南北20mの600m²の範囲に及ぶが、上層などの影響によって、遺構検出状況は必ずしも良好とはいえない。

(1) 畦畔(第12図)

畦畔はNo.1からNo.4までが検出された。No.1は検出長6.4m、上端幅30~100cm、下端幅120cm、水田面との比高差は、平均7cmを測り、N-22°-Eの方向に湾曲しつつ伸びる傾向をみせる。No.2は検出長5.7m、上端幅約25cm、下端幅約60cm、水田面との比高差は、平均5cmを測り、N-87°-Wの方向で真北にほぼ直交する。No.1との接続部分については依存状態が悪く、水口を形成しているものなのか判断できない。No.3は検出長はわずかに2.7m、上端幅約43cm、下端幅約78cm、水田面との比高差は、平均5cmを測り、N-9°-Eの方向で伸びるものと想定できる。No.4はNo.1~No.3と異なり調査区南東端部より1条のみ検出された。西端部を搅乱によって削平されていたため、検出長は6.2mにとどまった。また、上端幅20~50cm、下端幅約58cm、水田面との比高差は、平均6cmを測り、N-75°-Wの方向性を示す。

(2) 水田面と傾斜(第12図)

検出された水田区画は3区画であるが、平面形が復元できたものはない。傾斜については各区画の標高は、No.1(最高値255.20m、平均値255.18m)・No.2(最高値254.96m、平均値254.94m)・No.3(最高値255.30m、平均値255.17m)で緩やかに東北東に下る傾斜を想定できる。

(3) 溝状造構 (SD-2) (第12・13図)

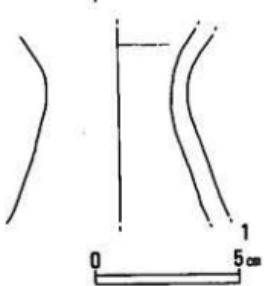
G-5区からH-8区にかけて、長さは約18.2m・最大幅195cm・最小幅62cm・平均深度25cmを有し南下する形状をとる。底面形は全体に平坦化している。溝内の堆積土は、C-D地点で3層認められたが、他の地点においては全て単層で、茶褐色粘土と砂礫がその主体を占める。

(4) 出土遺物 (第10・11図)

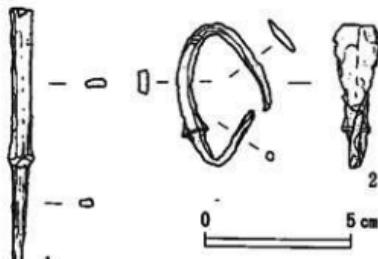
出土遺物は少なく、弥生土器・鉄製品・自然遺物のみである。出土状況は水田面を覆う灰色粘土層中からであり、他所からの流入したものと考えられ、水田經營の時期を決定する資料には成り得ない。

弥生土器 (第10図1) 壺型土器である。頸部付近のみの出土で頸部径は4.85cmを測る。内外面共に磨滅がひどく調整は不明である。

鉄製品 (第11図1・2) 1・2共に平安期の鐵鎌で、No.3畦畔北側延長線上の畦群あるいは水田区画を形成している灰色粘土層よりの出土である。鎌被が古墳時代の鐵鎌と形状が異なり、スカート状を呈する特徴がみられる。1は刃部を欠損し、最長軸・8.98cm、スカート幅・厚、0.85cm・0.88cmを測る。2は人為的に長軸4.80cm×短軸3.02cmの橢円リング状に曲げられており、長柄細身式の範疇に入る。最長軸・12.30cm、スカート幅・厚、0.88cm・0.85cm、刃部幅・厚、1.53cm・0.30cmを測る。



第10図 第2水田面出土土器



第11図 第2水田面出土鐵鎌 (S = 1 / 2)

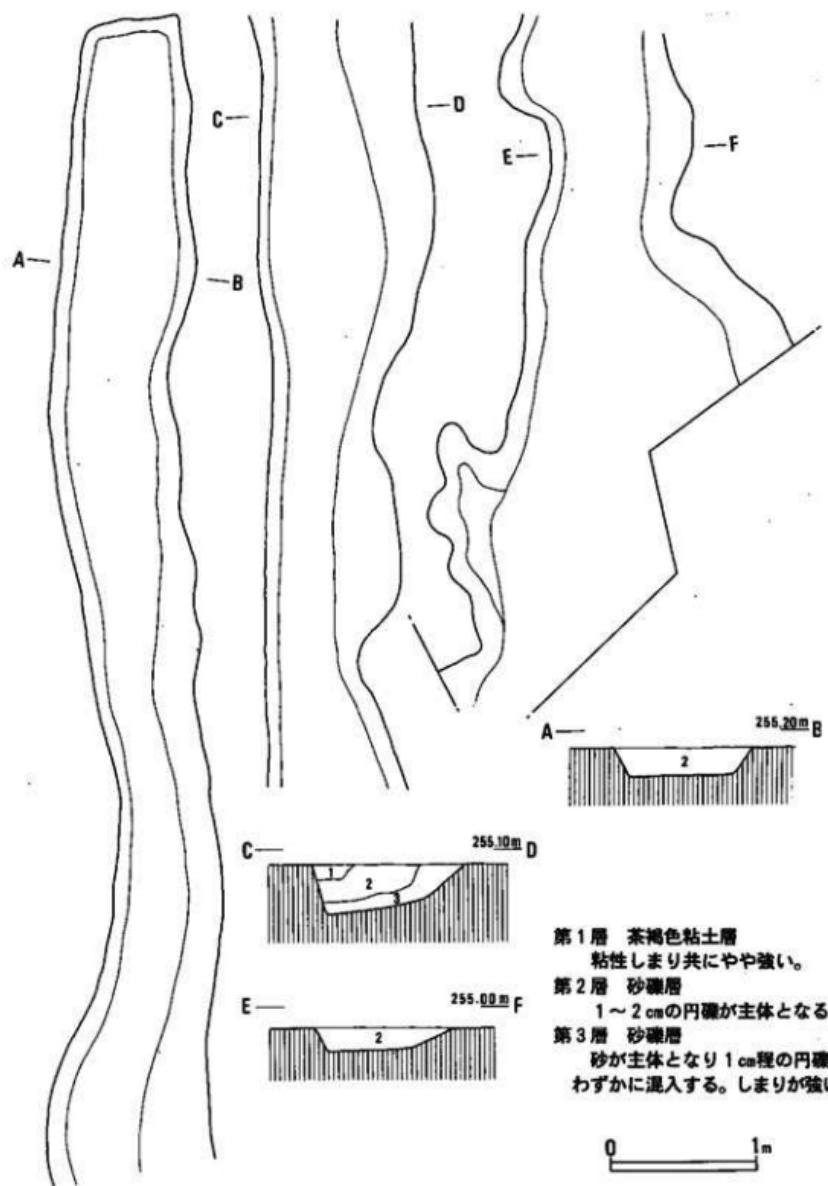
第3節 第3水田面

第3水田面は、試掘時において水田經營は行われていないであろうとされていた黒褐色腐食土層に造営されたもので東西約37m×南北約30m、面積約550m²の範囲で広がりが確認され、畦畔・水田区画・溝状造構で構成されている。水田面の南東部分は旧河川の本流により大きく削平を受けているが、依存状況は極めて良好である。なお、出土遺物は検出されなかった。

(1) 畦畔 (第12図)



第12図 第2・3水田面 全体図 ($S = 1/200$)



第13図 第2水田面 SD-2 平・断面図 ($S = 1/40$)

畦畔は西側からNo.1～No.19まで命名した。断面形はいずれも半円形を呈している。

No.1はわずかにその痕跡が確認されたもので計測是不可能であった。No.2は検出長7.4m、下端幅約80cmを測る。No.3はヌルメ状造構に両側を挟まれる形態を取っている。検出長10.9m、上端幅60～185cm、下端幅125～300cm、水田面との比高差は、平均10cmを測り、N-2°-Wの方向に走る。No.4は検出長13.0m、上端幅25～135cm、下端幅135～184cm、水田面との比高差は、平均15cmを測り、N-9°-Wの方位でNo.3と並行する。No.5はN-67°-Wの方位性を持ち、全長11.3m、上端幅約35cm、下端幅約70cm、水田面との比高差平均4cmを測る。No.6は検出長4.9m、上端幅20～45cm、下端幅57～87cm、水田面との比高差は、平均15cmを測る。方位はN-30°-Eである。No.7は検出長11.5m、上端幅78～125cm、下端幅84～200cm、水田面との比高差平均15cm、方位N-10°-Eを測る。No.8はN-72°-Eの方位で、検出長7.8m、上端幅約28cm、下端幅約55～75cm、水田面との比高差平均3cmを測る。No.9はN-10°-Wの方位で、検出長6.3m、上端幅約28cm、下端幅約45～73cm、水田面との比高差平均10cmを持ち、調査区外北側に伸びる。No.10はN-79°-Eの方位で、検出長は、わずかに1.6m、上端幅約34cm、下端幅約83cm、水田面との比高差平均10cmを持つ。No.11はN-5°-Wの方位で、No.8とNo.12をつなぐものである。全長は3.4m、上端幅約25cm、下端幅約75cm、水田面との比高差平均3cmを持つ。No.12はN-78°-Eの方位で、検出長10.4m、上端幅約25cm、下端幅約70cm、水田面との比高差平均5cmを測る。No.13は検出長4.8m、上端幅約38cm、下端幅約75～98cm、水田面との比高差平均7cmを測り、N-16°-Wの方位を持つが、No.14との接続部で若干西に進路を変える。No.14はN-87°-Eの方位で、検出長7.4m、上端幅約20cm、下端幅約80cmを測る。水田面との比高差平均8cmである。No.15は検出長は、7.7m、上端幅約36cm、下端幅約77cm、水田面との比高差平均10cmを持ち、N-70°-Eの方位で東北東に伸びる。No.16からNo.19までは確実に検出されたものではなく、痕跡のみの確認であった。No.16は全長8.3m、幅約70cm、N-25°-Wの方位を持つ。また、No.17は検出長9.1m、幅約55cm、N-70°-Eの方位を測る。No.18・19については、N-31°-W・N-79°-Eの方向性を持つものとしか捉えられなかった。

(2) 水田区画と傾斜(第12図)

水田区画として明確に数えることができるものは16区画である。しかし、面積と形状が把握できるものはNo.8の1区画、形状のみが想定できるものとしてNo.3・4・5・11・12の5区画が数えられるのみであった。No.8は5.0m×3.2m・面積約16.0m²の平行四辺形を呈しており、この形状を示すものは当区画しかない。この他、No.3・4・5・12の4区画については桿型を、No.11は、東西に長軸を持つ長方形あるいは、台形を示すものと想定でき、No.3・4大畦畔に近い部分に桿型の区画を南北方向に配する傾向がみられる。また、このNo.3・4大畦畔を境界として東西を2地域に分割できそうである。しかしながら、西側のものについては畦畔の検出状態が悪く、区画配置状況はつかめなかった。

状態の比較的良好な東側地域の15区画の内、平均最高標高を示すのはNo.2・3の255.48m、

平均最低標高を示すのはNo.15の254.92mであり、北西から南東にかけてなだらかに傾斜する傾向がみられる。また、H-7・8区において南側に急激に下る谷状地形が確認されており、No.19畦畔周辺を第3水田面の南端と推測することができる。

(3) 溝状遺構 (SD-3・4・5) (第12図)

No.3・4大畦畔に平行に走る3条の溝状遺構が検出され、西側よりSD-1～3とした。SD-1はNo.3大畦畔の西側に沿って8.6mに渡って検出され、上端幅約125cm、下端幅約60cm、平均深度12cmを持って南に傾斜する。SD-2と3はNo.3・4大畦間に設けられたもので前者は検出長2.9m、上端幅約90cm、下端幅約50cm、平均深度22cmで調査区北側に伸びる。後者は検出長10.2m、上端幅約50～240cm、下端幅約20～105cm、平均深度11cmで南に傾斜する様子が伺える。これらの溝状遺構については覆土の堆積状況より、上層から掘込まれたものではなく、第3水田面經營時に機能していたもので、性格は排水またはヌルメに関する施設としたい。

第4節 各水田面の造営時期

今回の調査では3面の水田面が検出されている。ここでは、それらの水田造営時期について若干の推測を加えてみたい。第1水田面においては水田面を西方より東にかけて切っている溝状遺構 (SD-1) より出土の磁器の年代から江戸期以前と考えられる。第2水田面では畦畔を形成している灰色粘土層より出土した鐵鎌の特徴と、山梨県内においても平安期から中世にかけて盛んに行われた殺馬儀礼の痕跡から平安期を充てるのが妥当であろう。また、第3水田面は非常に良好な状態で区画が検出されたが時期決定できる遺物の出土が皆無で層位的に第2水田面より前時期にあるとしか述べることができない。現在、中川田遺跡と同一の微高地に形成されている油田遺跡やその北側に隣接する向河原遺跡の調査が実施されており、これらの結果が加味されれば大枠でしか捉えられない造営時期が更に狭まつてくるであろう。

第5章 獣骨について

(1) 出土状況の所見

中川田遺跡から出土した獣骨は、骨片も含めて32個が検出され、それらは第2水田面からすべて検出された。その検出状況は、第2水田面を南北に貫流する溝にそって例外なく見出された。個々の状況は微細図で示したが、いずれも一個ずつ個別に見出されるのではなく、数個がまとまって検出されており、上流から流れ込んだのではなく、何らかの目的があって人為的にこの周辺に集中して遺棄されたものであろうと考えられる。伴出遺物が稀薄であるため、その理由についてははっきりしたことは述べられないが、(ア)同一層から検出され、(イ)しかも溝に沿って集中的に分布し、(ウ)いずれも馬の骨であることが確認されることなどから、雨乞などを中心とした殺馬儀礼が行われた跡ではないかと思われる。近年山梨県内でも、平安～中世にかけての遺跡の溝状遺構に、畜串などとともに馬の歯骨が検出される事例が増え始

めており、いずれもその検出状況は上記の（ア）～（ウ）の条件を満たすことが報告されている。⁽¹⁾ 本遺跡の周辺では、同じ甲西バイパス建設に伴う発掘を行った二本柳遺跡から、こうした事例が報告されており、本遺跡から出土した歯骨（馬の歯骨）も殺馬儀礼によるものと推測できるのではないかと考えている。

（2）歯骨（馬の歯骨）の所見

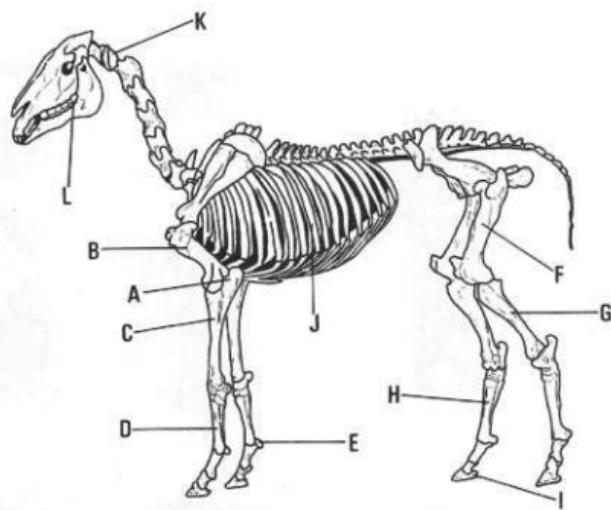
出土した歯骨は全部で32個で、すべて馬の歯であった（表、図 参照）。残存部位は、基節骨1、頸骨2（左1・右1）、頸椎1（第一頸椎）、尺骨1（右）、蹠骨1（右）、上腕骨6（左3・右2・不明1）、大腿骨2（右）、中手骨4（左右2個ずつ）、中足骨1（右）、橈骨4（左右2個ずつ）乳歯1（下顎骨右）などのほか、肋骨と推定される部位が2、部位不明の骨片6である。これらの馬は、その歯骨の状況からほぼ成獣であることが確認された。このうち、No.9の上腕骨左側は、No.22の橈骨左側と接合し、全長は32.5cmを測る。このほかNo.10の上腕骨右側は、No.23の橈骨右側と接合し、全長は34.5cmを測る。このように、上腕骨と橈骨が接合したことから、この馬の体高を推測することが可能となってくる。⁽²⁾ それによると、左側の馬は体高132.7cm、右側の馬の体高は122.5cmと推測される。このほかにも、中手骨からも体高は推定でき、それによればNo.15とNo.18では120.2cm、No.16では145.0cm、No.17では91cmとなり、現存長なので若干の誤差を含むが、いずれも120～140cm前後と考えることができ、橈骨から計算・推定された馬の体高とほぼ一致すると見てよいであろう。そしてその大きさは、現在の木曾駒とほぼ同じということができる。

また残存部位は、馬の頭蓋骨を除く前・後脚部に集中し、背骨などを始めとする部位が残されていない。これが単なる流出もしくは散逸によるものか、発掘範囲外に埋蔵されているせいか、もしくは当初からこれ以外の部位は、祭祀に使用されなかったためかは、今後の課題として残される。

最後に、この遺跡から検出された馬の歯骨から、祭祀に供されたと思われる馬の頭数について考察しておきたい。本遺跡からは、中手骨や橈骨が左右それぞれ2個ずつ検出されているが、上腕骨が3個検出されているので、恐らく3頭がこの遺跡に祭祀に供されたものと推測される。なお歯骨鑑定にあたっては、国立歴史民俗博物館西本豊弘氏にご指導・ご教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。

（1）山梨県内の遺跡では、地耕免遺跡（御坂町成田）・二本柳遺跡（中巨摩郡若草町）・宮ノ前遺跡（韮崎市）などがある。なお前者の2遺跡については、『年報』7・8・9（山梨県埋蔵文化財センター、1991～3）参照。

（2）馬の歯骨の残存部位をもとに、生前の体高を推測する計算式については、林田重幸・山内忠平「馬における骨長より体高の推定法」（『鹿児島大学農学部学術報告』第6号、一五五七）を参照。なお本文中で利用した計算式は、橈骨（Radius） $Y = -0.14X^2 + 13.72X - 165.42$ ・中手骨（Metacarpus） $Y = -0.34X^2 + 20.87X - 160.02$ （Xはいずれもパートの大きさ）による。



第14図 馬骨格図（原図：加藤嘉太郎「家畜比較解剖図説」上巻所収）

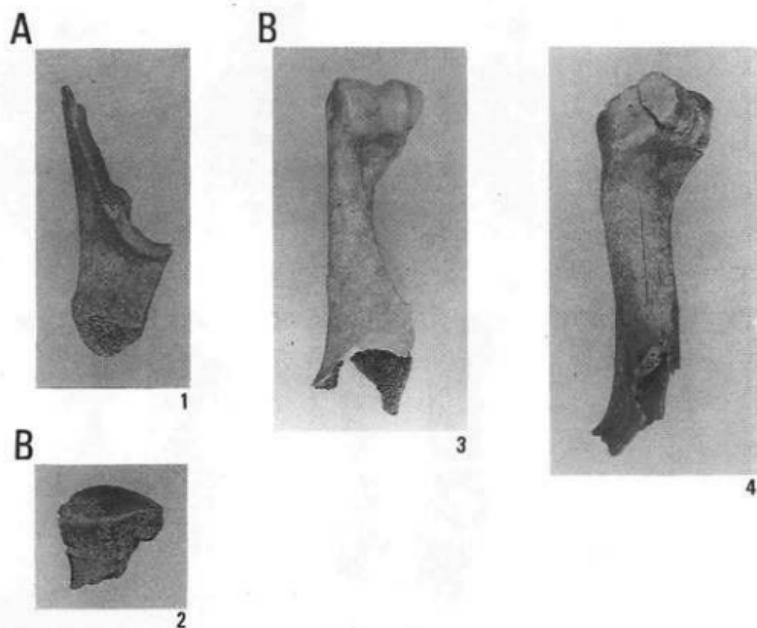
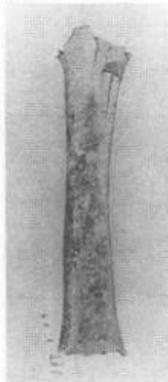


写真1 獣骨

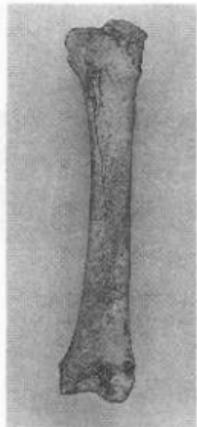
C



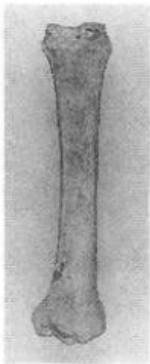
5



6

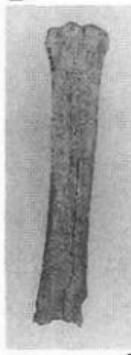


7

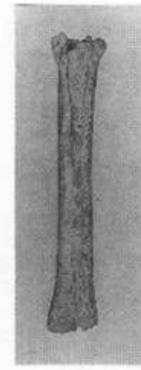


8

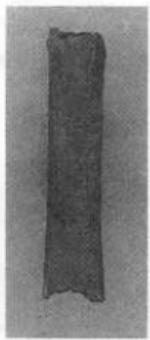
D



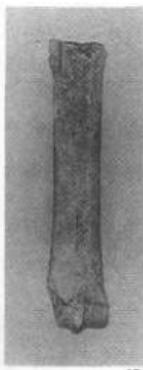
9



10



11



12

E

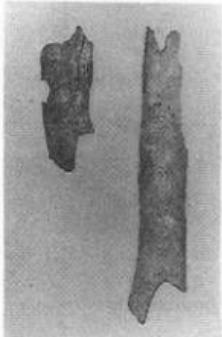


13

F



14



15

写真2 獣骨

G



16



17

H



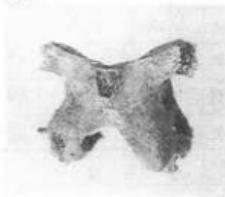
18

I



19

K



21

J



20

獣骨 (馬の歯骨)

(単位: cm)

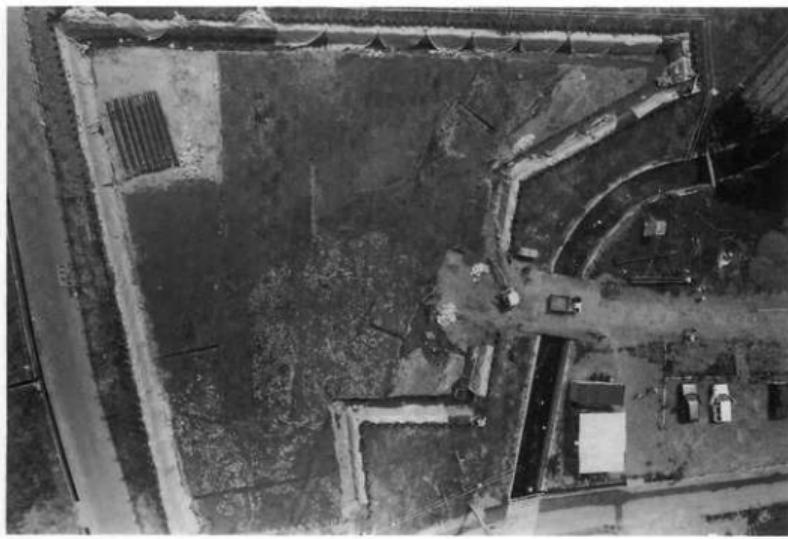
No	No	写真	部位	左右	全長	上幅	下幅	備考
1	B-6	13	E 基節骨	左右不明	—	—	—	
2	B-2-1	16	G 脊骨	右側	29.0	—	7.3	全長は現存長。部位は頸骨の中～下部にかけて残存。成歎前後と推定。
3	B-8-1	17	G 脊骨	左中間部	22.0	—	—	現存長
4	B-2-3	21	K 第一脛椎	—	8.3	8.6	9.1	いずれも現存長
5	B-15-4	1	A 尺骨	右側	15.2	—	—	B-15-2と接合、尺橈骨の長さ370.0±。
6	B-2-4	19	I 腕骨	右側	8.7	—	—	現存長
7	B-12-1	—	B 上腕骨	左中間部	17.2	—	—	現存長
8	B-12-2	2	B 上腕骨	?	—	—	—	上端部のみ残存
9	B-13	3	B 上腕骨	左側	—	—	6.6	成歎、上端部欠、B-14と同一固体
10	B-15-1	4	B 上腕骨	右側	23.6	65.5	—	成歎、下端部欠、B-15-2と同一固体
11	B-15-5	—	B 上腕骨	右側	8.3	—	—	B-15-1と接合
12	B-16	—	B 上腕骨	左側	5.8	—	—	左下のみ残存
13	B-2-2	14	F 大腿骨	右中間部	23.9	—	—	上・下端部欠
14	B-10	15	F 大腿骨	右側	—	—	—	
15	B-4	9	D 中手骨	右上	19.9	—	—	全長は現存長
16	B-5	10	D 中手骨	左側	23.9	—	—	下端欠、全長は現存長
17	B-9	11	D 中手骨	左側	16.4	—	—	全長は現存長
18	B-15-3	12	D 中手骨	右側	19.9	—	—	上下端欠損
19	B-7-1	18	D 中足骨	右中間?	18.9	—	—	上下端欠損、全長は現存長
20	B-3	5	C 桡骨	右側	25.7	—	—	上下端欠損、全長は現存長
21	B-11	6	C 桡骨	左中間部	22.0	—	—	全長は現存長
22	B-14	7	C 桡骨	左側	32.5	7.3	6.8	成歎、B-13と同一固体
23	B-15-2	8	C 桡骨	右側	30.4	7.2	6.5	成歎、B-15-1と同一固体
24	B-7-2	—	L 乳齒	右側?	5.1	2.4	3.0	下顎骨右の乳齒
25	B-2-5	20	J 肋骨?	—	—	—	—	
26	B-8-3	—	J 肋骨?	?	—	—	—	骨片
27	B-1	—	—	?	—	—	—	骨片
28	B-2-6	—	—	?	—	—	—	骨片
29	B-2-7	—	—	?	—	—	—	骨片
30	B-8-2	—	—	?	—	—	—	骨片
31	B-12-3	—	—	?	—	—	—	骨片
32	B-15-6	—	—	?	—	—	—	骨片

図 版

図版 1



調査地近景（北側より撮影）



第 1 水田面完掘状況



第1水田面完掘状況（部分）



4号大畦畔と工具痕



SD-1完掘状況（部分）

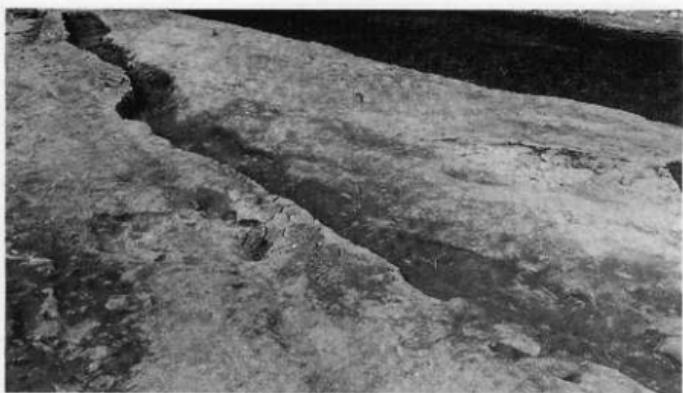


第2・3水田面完掘状況

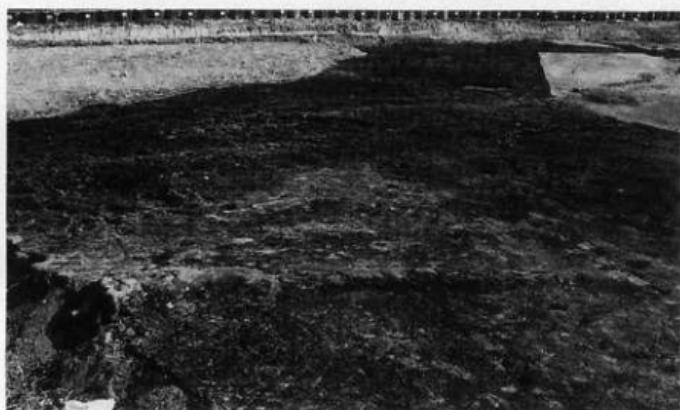


第2水田面完掘状況
(部分)

図版4



SD-2 完振状況

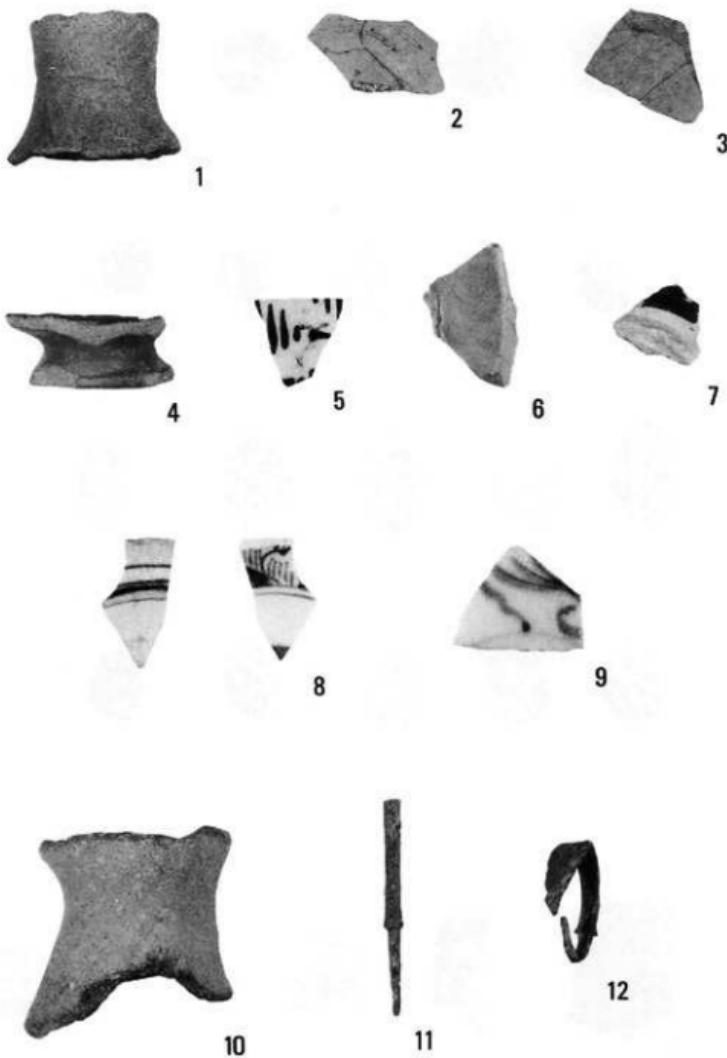


第3 水田面完振状況（部分）



第3 水田面SD-3・4・5検出状況

図版 5

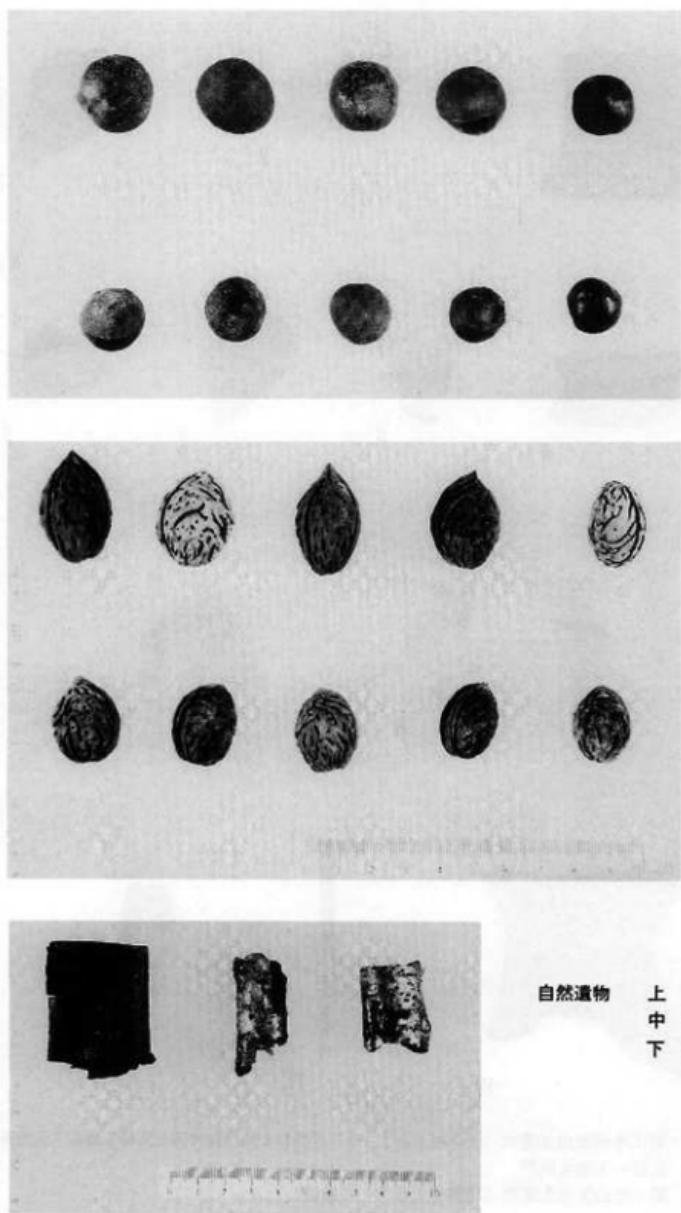


1~7 第1水田面出土遺物 (1弥生土器 2・3甲斐型壺 4柱状脚付皿 5染付 6青磁 7天目茶碗)

8・9 SD-1出土染付

10~12 第2水田面出土遺物 (10弥生土器 11・12鉄鎌)

図版 6





上 シートパイル工

下 調査風景



報告書概要

フリガナ	ナカカワダ イセキ		
書名	中川田遺跡		
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第77集		
主著者・従著者	吉岡弘樹・平山優		
発行所	山梨県教育委員会		
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター		
住所・電話	山梨県東八代郡中道町下曾根923 ☎0552-66-3881		
印刷所	(資)ヨネヤ印刷		
印刷日・発行日	印刷 1993年3月20日	発行日 1993年3月31日	
中川田遺跡	所在地	山梨県中巨摩郡甲西町田島字中川田	
	25,000分の1地図名・位置	小笠原	138° 28' 35" 36' 標高256m
概要	主な時代	平安時代～江戸時代末	
	主な造構	平安時代から江戸時代末までの水田址 3面、溝状造構 5条	
	主な遺物	陶磁器（青磁、天目茶碗、染付等）・平安時代土師器・鉄鎌・等	
	特殊遺物	獸骨（馬）・自然遺物（桜皮・種子類）	
	調査期間	1992年6月1日～9月12日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第77集

1993年3月20日印刷

1993年3月31日発行

なか かわ だ 中川田 遺跡

編集 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曾根923
☎0552-66-3881

発行者 山梨県教育委員会
印刷機 ヨネヤ印刷

